

令和4年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2770302202		
法人名	社会福祉法人 月の輪学院		
事業所名	グループホーム つかさの家		
サービス種類	認知症対応型高齢者共同生活介護		
所在地	大阪府寝屋川市仁和寺本町2-3-5		
自己評価作成日	令和4年12月26日	評価結果市町村受理日	令和5年2月27日

【事業所基本情報】(介護サービスの情報公表制度の基本情報リンク先URLを記入)

https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/27/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigvosyoCd=2770302202-00&ServiceCd=320

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 介護保険市民オンブズマン機構大阪		
所在地	大阪府大阪市北区天神橋3丁目9-27 (PLP会館3階)		
訪問調査日	令和5年2月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍の制限のある中で、利用者が穏やかに楽しんで暮らしてもらうためにどうすればいいかをスタッフ一同考え、私たちの理念である「利用者の何気ない一言を大切に、心の声を聞いて聴いて訊いていく」ということを元に、いつも利用者のそばにいて話をきくことを徹底した。ひとりひとりの利用者の個性を生かすことができ、笑顔が絶えないグループホームを目指し、支援をしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

長年、知的障がい児・者の支援事業を運営している社会福祉法人が、子どもから高齢者まで一貫して福祉サービスを展開しようと設立したグループホームです。豪邸を改装したホームには、バリアフリー化された手入れの行き届いた庭園があり、四季折々の景色を楽しむことができます。ホーム内は広くて明るいダイニングキッチンがあり、リビングを中心に生活共同空間として家庭的で落ち着いた安らぎのある場となっています。毎年、法人理念を基に「私たちの理念」を作っています。今年はコロナ禍の中で学んだ事を活かして「利用者の何気ない一言を大切に、心の声を聞いて、聴いて、訊いていく」と掲げ、利用者へ寄り添う支援を実践しています。チームワークのよい職場環境は離職者も少なく、利用者や職員の馴染みの関係ができていて質の高い個別支援に繋がっています。専従のキッチンスタッフが作る心のこもった手作りの食事は、ホームの大きな自慢のひとつです。利用者・家族・職員から安心と信頼を得ている看護師であり計画作成担当者でもある管理者を中心に、職員一丸となって支える利用者の暮らしは、ほのぼのとした雰囲気になったグループホームです。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができて (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を踏まえた上で、毎年度今入居している利用者全員に想いを寄せ、「私達の理念」をスタッフ全員で考える機会を作っている。今年度はコロナ渦の中で「利用者の何気ない一言を大切にし、心の声を聞いて聴いて訊いていく」の理念の下、支援している。ダイニングやリビングに理念を掲示し、スタッフには携帯してもらっている。	法人理念を基に「私たちの理念」を毎年、非常勤職員を含む職員全員で作っています。今年度はコロナ禍の中で学んだ事を活かし「利用者の何気ない一言を大切にし、心の声を聞いて、聴いて、訊いていく」と掲げ、利用者へ寄り添う支援を実践しています。理念は、ダイニングやリビングに掲示し、日常的に確認する工夫をしています。利用者へ寄り添い、利用者の個性を活かせる暮らしの支援の実践に、管理者は理念の確かな浸透を感じています。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ渦で地域の人と交流する機会は減っているが、地域のなじみの方から励ましの絵手紙をいただいたり、庭の草抜きに来ていただいた方から声をかけていただいたりしている。	歩道の落葉掃除をしていると声が掛かったり、野菜が届いたりなどは日常の光景で、地域住民の方とは隣近所の付き合いができる関係が続いています。地域の馴染みの方から励ましの絵手紙ももらいました。地域の方が庭の草引きをしてくれることもあります。米を購入する近所の米屋は、美味しいご飯にこだわるホームの考えを理解し便宜を図ってくれています。入居者の買い物のための移動スーパーを地域住民も利用できるように検討中です。	地域住民の移動スーパーの利用や、ホーム横の広場の活用で、地域住民との交流の機会が増え、認知症の啓発にも繋がるのが期待されます。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ブログで定期的につかさの家の情報発信を継続している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回、利用者の状況支援の取り組み、行事報告などの会議録の資料を渡している。意見などは電話を通じて意見をもらっている。家族会の会長には短時間ではあるが実際に会ってつかさの家の現状を伝え知ってもらっている。	市議員、自治会長、老人会会長、民生委員、地域包括支援センター職員等の参加で2ヶ月毎に実施し、参加者から評価や助言を得て、ホームの運営に活かしてきました。コロナ禍で現在は議事録を渡して意見を聞いています。委員からの意見や労い・励ましの言葉は記録し、職員間で共有しています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域包括支援センターからの依頼で、有料老人ホームから当グループホームに入所依頼があり、受け入れた。その際、地域包括支援センターの方には日頃のスタッフの状況(男女比)や、運営推進会議の資料などの支援状況を見て依頼があった。	運営推進会議に地域包括支援センター職員の参加があります。市担当者とは都度連絡をとれる関係を築いています。有料老人ホームからの入居依頼があり、受け入れに際して地域包括支援センター職員、ホーム職員と協議を重ねる機会が増え、市との連携がより密になりました。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は門扉及び玄関は開放している。スタッフが出入りする出入口も開放している。法人全体で身体拘束廃止委員会を設けて委員として定期的にグループホームの現状取り組み、困りごとなどの意見交換をしている。身体拘束チェックリストを作成し、スタッフにも意識づけを徹底し、チェックリストに基づいてスタッフとも話し合いをしている。	身体拘束廃止に関する指針・身体拘束排除マニュアルを作成し、身体拘束廃止委員会を開催、定期的に研修も行っています。虐待防止チェックリスト自己点検表を作成し、毎月自己点検を実施し、チェックリスト自己点検の結果に基づき、虐待・身体拘束入時委員会で話し合いも行っています。日中は門扉、玄関は開放しています。管理者は、職員に関心を寄せ、勤務に配慮する等、職員のストレスが溜まらないように見守っています。離職者が少なく、長く一緒に働いている同士だから分かり合えることも強みとなっています。管理者は「包み込んでくれる職員の存在に助けられています」と感謝しています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	チェックリストを見ることによって、スタッフに振り返りをしてもらい、リーダーとも言葉づかいや虐待につながる場面があるかどうかを話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、後見人制度を活用している。利用者がある中で定期的に後見人の役割をスタッフに話すことによってスタッフにも理解してもらえるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には必ず時間をかけて説明し、後に疑問点をたずね、その都度補足している。特に金銭的な部分においては加算も含めて説明するよう心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	月1回、管理者からの全体報告、担当者の自筆の手紙・写真などを送っている。特に新しく入居された利用者の家族には、ブログや外部評価を見ていただくよう説明している。直接電話して要望や状況を説明している。面会などは府・市の要請に応じているが、柔軟に玄関などで対応している。	「家族との関係を断ち切らないことが大切」との考えで、家族とは密に連絡を取り合っています。コロナ禍での面会は、事前に予約し健康チェックを行った上で距離を開けて行なっています。毎月1回、家族に送る手紙には利用者の写真を添え、温かみが通じるよう担当職員は自筆のメッセージを書いています。毎月の手紙も、定期的に更新するブログも家族には好評です。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人会議を2～3か月に1回行っており、管理者が参加し、そこでスタッフの意見も反映させた様々な状況を報告し、法人全体で問題解決に取り組んでいる。法人の理事長、事務長は、1回/週はホームに顔を見せ、スタッフにも声をかけコミュニケーションが図れている。	毎月の月例会で職員は意見を出し合っています。管理者は、会議のほか、日常的に職員の意見や要望を聞いています。管理者、介護職員、キッチンスタッフそれぞれが相手の仕事に敬意を払い感謝しあうチームワークのよい職場環境は、職員の定着に繋がっています。経験年数の長い職員が多い中、新人職員からの新しい気づきを「ほんまですね」と真摯に受け止め、今更と思うようなことも心置きなくたずねあう事ができる職場の風土です。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者(理事長、事務長)より、人員不足の際は色々なアドバイスをいただく。また、利用者にコロナ発症があった際には、コロナ手当を職員・パート全員に法人よりいただいた。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	パソコンでいつでも空いた時間に動画を使って研修できる仕組みを取り入れてもらい、全員活用できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ渦で同業者と交流する機会は少なかったが、法人全体で勉強会を行い、アンガーマネジメントの研修を行った。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	病院から施設に入所する利用者に関しては、何度も面会・体験入居を通じて、本人との関係づくりに努めた。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様の要望を聞いたうえで、今までの生活歴や知りたい情報をやり取りし、書面にまとめて、どのようにしていくかを段階を追って説明している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	導入する前に情報収集・アセスメントをし、担当者会議をし、家族にも参加し、グループホーム以外の選択肢も考え、対応も考えている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する側とされる側の上下関係になっていないかの視点を持ちながら、お互いを支えあう関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族さんには協力していただき、強制的にはならないようにどこにいても利用者を支える1番の存在は家族だという事を伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	最近入居された利用者さんに関しては、本人が1番落ち着く姪っ子さんの子どもさんと定期的に面会してもらっている。面会時には動画を撮ってもらい、いつでも見てもらえるようにしている。本人の家の前をドライブで通ったり、以前通っていた寿司屋から出前をとった事例もある。	職員は、これまでの馴染みの関係を少しでも継続することが利用者にとって大切なことと理解し、支援に努めています。認知症の人のためのケアマネジメント、センター方式のシートを使って、長年なじんだ習慣や好み等把握しています。病院受診の帰りに自宅の前を通って帰る利用者や、面会時に撮った姪の子ども達の動画を楽しむ利用者もいます。時には、利用者の馴染みのうなぎ屋から出前をとることもあります。庭には亡くなった利用者の家族からもらった桜の木があり、利用者の名前をつけ、偲んで眺めることもあります。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が支えあえるようリビングに座る位置を固定し、散歩なども一緒に行くようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去された家族様がホームに来てくださり、本人の書いていた小説や本人との思い出を話して下さる。家族の健康相談にも応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉で自分の想いを伝えることが困難な利用者さんには、事前に家族様から情報(サインや仕草)をいただき、それに基づいて支援している。特に入所前のアセスメントが重要になってくるので、利用者の自宅に訪問し、なじみの関係性や物などを把握した。	職員全員で考えた「今年の理念」に「利用者の何気ない一言を大切にし、心の声を聞いて、聴いて、訊いていく」を掲げ、個別ケアを実践しています。職員は、利用者との何気ない会話や動作から本人の意向や要望を把握し、管理日誌や介護記録に残し、職員間で共有しています。管理者は、最初の信頼関係の大切さや、話すときの声のトーン、話し方とうなずきの注意点などを職員に伝え、寄り添うケアを大事にしています。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族様には事前に聞きたい項目を文章でお渡しし、ひとつひとつ確認し写真などもいただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の以前の在宅での過ごし方を把握したうえで、本人のできることに焦点をあてて支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者の想い、家族の意向がどのようなことかを入所前からスタッフ・家族と話し合い介護計画を作成している。モニタリングが計画に沿って行えているのかどうかわかりやすい様式に変更している。月1回は必ず支援方法を検討する場を設け、日々の変化は管理日誌に記載して柔軟に対応している。	利用者・家族の意見や意向を尊重した介護計画です。基本半年毎に更新していますが、体調や状態に変化があれば、都度更新します。モニタリングは3ヶ月毎に実施しています。厚生労働省が推進しているLIFE(科学的介護情報システム)を導入し、根拠に基づいた質の高いサービス提供を目指しています。計画作成担当者でもある管理者は、利用者の言葉を大事にした介護計画作成を心がけています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入所当初は、個別記録用紙を用いて細かく情報収集できるよう努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	リビングだけでなくダイニングにもテレビを設置し、好きな場所で過ごせるよう、ソファの位置など工夫している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	庭や建物外の落ち葉拾いにスタッフと参加したり、地域のお祭りなどに参加させていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前のかかりつけ医を希望される場合は継続し、看護師も家族と同行し本人の状態を把握するよう努めている。内科的なことは訪問診療と取り入れ、希望する家族には2回/月診察に来てもらっている。利用者との関係も良好である。	往診医の月2回の訪問や看護師資格を保有する管理者の存在で家族の安心と信頼を得ています。利用者の体調に変化があるときには往診医に連絡し、入院が必要なときも病院との連携を活かし、退院後の支援もスムーズに行っています。入居前のかかりつけ医を希望される家族や、訪問でのマッサージを希望する利用者にも柔軟に対応をしています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	管理者が看護師を兼務しているので、日々の健康管理や薬剤管理、緊急時の対応などスタッフと情報共有し医師との連携にも努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は、相談員との連絡を密にしている。訪問診療の意思が入院先の主治医になることが多く、家族とも早期から病状など説明を行えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今年度は看取りはなく、1名が急変によって最期を看取る形となった。スタッフは看取り期としてとらえた5日間は、みんな同じ想いで本人に寄り添い、ケアを行えた。その際の振り返りも行った。キッチンスタッフにも同じく振り返りを行っている。	入居説明の時に、終末期に向けた指針をもとに説明を行っています。看取りの場合には医師も一緒に、「家族は利用者とともに過したいのか」を丁寧に確認し、終末期を穏やかに過せるように寄り添い、支援しています。職員同士も看取りに寄り添う職員の気持ちを想いやり、癒やしの一言をさりげなく伝えるなど自分たちのできることで、職種にかかわらず一丸となって支えています。全員参加の振り返りは、職員にとって、グリーフケアや看取りをステップアップする大切な学びの時間になっています。細やかな支援に家族から感謝の手紙が届いています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	発熱時の対応、帰宅願望が強い利用者が無断外出した際のスタッフの連絡体制など話し合った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災時の総合訓練を継続する。その他災害においては、法人全体で制作した災害時のマニュアルを活用している。利用者の介護度が高くなってきていることもあり、避難時に首からかけて使用可能な本人情報証を作成し、避難中の安全対策を行った。コロナ渦により地域との連携が難しい中、地域運営推進会議の中で定期的に防災情報を報告し記載した資料を配布している。	災害対策計画書・職員連絡網・備品関係・事業継続計画書を作成しています。災害時に備え写真を添えた本人情報証はすぐに使えるように玄関の扉にまとめて掛けています。夜間の災害発生や、利用者の重度化に備え、法人本部と連携できる体制を考えています。年に数回自主訓練を行い、非常用の水や食料品、災害グッズ等の備蓄品も各階に置いています。	備蓄の食料品は、賞味期限や入れ替え時期が誰でもわかるように一覧表にされてはいかがでしょうか	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自分の想いを言葉にできない利用者が増える中で、入浴・排泄などの羞恥心を損ねない同性介助を心掛け、自然な介助(お手伝い)を心がけている。足音や声の大きさなども気を付け、目の高さに合わせて話しかけている。チェックリストも活用し振り返っている。	プライバシーのチェックリストを毎月チェックすることで一人ひとりが振り返っています。チェックリストの項目は日課の中の基本として守るべきことを掲げており、見直しも考えています。排泄介助の声かけを聞いて気づいたことを研修で取り上げることもあります。日常の取り組みで、利用者の声を聞く(聴く・訊く)ことを大切に心がけています。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個別の話や散歩やおやつ時間などに、さりげなく近くに座り、日常会話の中で本人の想いを組み取っている。	/		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	それぞれのペースで暮らせるように部屋で午睡したり、ソファで横になったり、TVを見たり、食事の時間や食事する場所もそれぞれに変えている。	/		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性利用者が多い中で、入浴後のヘアオイルや化粧水・乳液などでそれぞれ整えたり、本人の好みの服を着てもらおう。ネイルも導入している。	/		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	重症化に伴い、利用者がキッチンの準備などはできなくなっているが、今年は本人の好きなものを購入できる移動スーパーに2回/月来てもらい、おやつや好みの食材を選んで食してもらっている。長年のキッチンスタッフは利用者の好みの味付け、食事形態、量などを把握し、おいしく食べてもらう工夫をしている。キッチンスタッフの味付けのカボチャ以外食べれない利用者もいる。	食事は材料は業者が毎日納入し、キッチンスタッフがフロアで調理をしています。食材は業者の立てた献立に応じた物ですが、キッチンスタッフが利用者が食べやすいようにアレンジした食事を提供しています。利用者の嗜好を知り尽くしたスタッフが作る食事は大好評で、施設の自慢のひとつになっています。日曜の昼食は介護スタッフが担当し、地域の馴染みの店から出前を取ることもあり楽しみのひとつになっています。コロナが下火になり地域との交流が可能になれば、施設の芝生の庭でのティータイムや一緒に食事を楽しむことも考えています。「移動スーパーとくし丸」が来ると好きなおやつを選び、自分でお金を支払いコミュニケーションの場にもなっています。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分1,500cc目安にし、バランスよく飲めるよう工夫し、ゼリーや果物、好みのジュースで対応している。栄養バランスはキッチンスタッフに相談し、補食としておしるこやホットケーキなど手作りで対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	定期的に訪問歯科を取り入れ、嚥下状態のチェックも行っている。毎食後、個別で歯磨きを行ったり、介助している。重症者には歯磨きティッシュを利用している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ベット上でオムツ交換の利用者が入居し、排泄パターンや訴えに耳を傾け、リハビリパンツに移行しトイレで排泄できている事例がある。夜間もポータブルトイレを利用し、本人のサインがわかるようみんなで情報共有している。オムツも利用者にあったオムツを利用し、排便もできる限り朝食後にトイレに座ってもらうように支援している。	おむつから紙パンツに移行することで日中はリビングで過ごすことが多くなりました。排泄は便薬を使わない自然排便を目指しています。家族からの情報をもとにヨーグルトの摂取をすることで自然排便につながり下剤を止めることができたケースもあります。利用者の好みに合わせ、スポーツドリンク・ココア・乳酸菌飲料に寒天を入れゼリーにするなど水分摂取の工夫もしています。オリゴ糖や牛乳・ヨーグルトを取り入れたり、トイレの環境作りや緊張をさせない方法を模索しながら朝食後の排泄を促しています。排泄表の確認と共に訴えを聴き、運動も取り入れることで排泄の改善に努めていきます。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便のパターンを排泄表で確認し、トイレに座ってもらい、オリゴ糖や牛乳を用いて自然排便に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	2～3日に1回入浴支援を行い、入浴剤など好みで使用している。同性介助を心掛け、個別入浴を基本とし、安全のため重症者には2人介助にしている。本人の希望に合わせて入浴しているが、ほとんどの人が昼間(午後から)を希望している。シャワー希望の方には足浴をセットにしている。	個々の入浴日は決めていませんが、利用者の状態を確認しながら週2～3回の入浴を行っています。入浴は好まないが鏡で顔を見るのが好きという人には、焦らずに顔を見ることから徐々に入浴に導けるようにしています。2人介助が必要で同性介助が難しい場合には浴室から出るタイミングですぐ交代できるようにしています。こだわりのシャンプーや化粧水などは好みの物を使う事ができます。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	眠る前にホットミルクを提供したり、夜は安全なスリッパに履き替えている。光(電球)の調整もしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の管理は看護師が行い、変更があるときは、その都度管理日誌で申し送りをしている。その際は、注意点・症状の変化など観察事項を説明している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	昔携わっていた仕事に近いなじみの手作業（紙折り、コイン並べ）などできることに焦点を当て、支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染予防関係上、外出は困難であったが、少しずつ散歩や庭に出るなどしている。庭も利用者が歩きやすく段差を解消している。今年度は個別での外食を行えたほか、移動スーパーを利用し、買い物を楽しんでもらっている。	車椅子で移動しやすいように改装した庭での散歩や、サンルームから自由に臨む景観を楽しんでいます。春に観る桜の花、吹く風や鳥のさえずり、秋には落ち葉の片付けなど、季節の移ろいを身近に感じることができず。近隣の人は声を掛けて行き交い、地元の店に食事に行った時には料理はもちろん店員の和服姿も楽しみました。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	移動スーパーが来た際にそれぞれの財布で買い物を楽しみ、支払いをしてもらっている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	最近入所した利用者さんは、遠方の兄弟に手紙などを書きやり取りをしている。電話がかかってきた際は、必ず本人と話をしてもらっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関は常に開放している。庭に利用者が安全にいつでも出られるよう段差の解消を行った。台所と食堂はコロナによりアクリル板を設置しているが、食堂と居間とそれぞれ食べる場所をかえてゆっくり食事をしてもらっている。サンルームは、コロナの中での面会が、換気を行いながらできるため、利用者と家族をつなぐ空間になっている。	採光の良い明るいリビングとダイニングやサンルームがあり、アクリル板の設置で感染にも注意を払いながらも、好みの場所で過ごすことができます。「人の気配を感じながら横にもなりたい」との利用者の要望に応え、ダイニングにベッドを置いています。風船バレーをする人や、かわいい花の素材に糸をとおす人、テレビを見る人と、思い思いに過ごしています。ホーム内は清潔できれいな空気に満ち、「施設の臭い」ではなく、「食事の匂い」がするホームと、職員は誇りに思っています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間にソファベットの置き、自由に眠れる空間を作っている。サンルームにも自由に出入できるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の以前暮らしていた部屋を参考に、なじみのものを持ち込んでもらっている。なじみの枕や家族の写真、本人が作った絵などが飾られている。	入居前まで通っていた部屋の雰囲気を持ち込めるように、家族と話し合いながらその人らしい部屋作りをしています。愛用していたお気に入りの寝具をそのまま使っている利用者もいます。家族写真や整理ボックス・洋服掛けを持ち込み、自分らしい居心地の良さがある居室になっています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	なるべくシンプルにわかりやすい短い単語で場所の目印にしている。		